

エッセイ・チャレンジ ヒント集 その1

エッセイ（随筆）は、筆者の体験や感情を自由につづる文学的な文章です。基本的には、書きたいこと（＝「テーマ」）が決まったら、思いのままに書いていけば良いのですが、やはり書き方のうまさ、文章の味わいがあると、読者の心に響くものになるでしょう。

例えば、今回のテーマ「音」「音楽」について書くとき、「私は、音楽が好きです。私の好きな音楽家はモーツァルトです。」という文章では、読んだ人の心に訴えるものがあまりありません。同じことを書くにも、例えば、「モーツァルトを聞くと、どんなときでも私の心は安らぎを感じる。」「モーツァルトは私の体の中を駆け巡る血液のように、私の命の大切な一部である。」などと表現すると、筆者がどれくらいモーツァルトが好きかが伝わってきます。同じ思いや気持ちを、どう表現するか。そこにエッセイのおもしろさがあります。

下の文章は、朝日新聞5月19日朝刊の『天声人語』に載っていたものです。『天声人語』は、「エッセイ」ではなく、「コラム」というジャンルの文章ですが、書き方の工夫については、エッセイのそれとよく似たものです。

私は、子どもの頃に大好きだった「人造人間キカイダー」の話を使って書かれたこのコラムを読んで、筆者の書き方や表現方法、文の工夫に大変感銘を受けました。このコラムのテーマは、今全世界で話題になっている「人工知能（AI）」です。「人造人間キカイダー」を知らない人にはわからないかもしれませんが、私が、この文章のどこに「うまいなあ」「味わい深いな」と感じたのかを紹介してみます。皆さんも、読んでみてください。

「コラム」とは？

コラムとは、新聞や雑誌、Webメディアなどに掲載される短い評論や意見記事のことです。

特に新聞に掲載されるコラムは、字数の限られたスペースにテーマに沿った筆者の意見を書いたもので、単なる事実の報道（ニュース）とは異なり、筆者独自の視点や感想、分析を交えて書かれているのが大きな特徴です。

また、「コラム（円柱）」ということばからもわかるように、大抵は紙面の一部の隙間のようなスペースに書かれるので、改行するスペースを節約するため「▼」のような記号が使われます。

これは本題の「人工知能・AI」の話題にうつる今、人類の未来が感じている不安について語る。

人間とは何か？
キカイダーのエピソードを紹介しながら、私たちが根源的な問いを突きつけ、読者に一担立ち止まらせる。

更に「新聞」というメディアらしい、ニュース性を感じさせるのがこのエピソード。このエピソードにあわせて、筆者はAIについて語る。

なぜ「キカイダー」なのか？ このコラムで筆者が言いたいことのヒントとなるエピソードを紹介される。

「えっ？ 何の話？」とドキッとさせられる書き出しがある。私の次の文章に入る前にキカイダーのことなど気付いた。

「私にはわからない」「すぐには答えがわからない」「指先で示す」と表現している。

天声人語
彼の名前は、シローという。ロボット工学の世界的な権威、光明寺博士がつくった人造人間である。シローには悪の命令に従わない「良心回路」が埋め込まれている。でも、それは不完全であり、彼は善と悪の間で悩みながら強敵に挑んでいく▼「仮面ライダー」の原作で知られるマンガ家、石ノ森章太郎が描いた異形のヒーロー「人造人間キカイダー」の話だ。1970年代にテレビ番組で放送された。興味深いのはハワイの日本語テレビでも人気を博したこと。マウイ島には記念日もでき、きょうがその日だったとか▼マンガを見つけて、久しぶりに読んでみた。こんなに深い内容だったかと驚く。例えば、シローことキカイダーが良心回路の改良を断る場面がある。彼は言う。「不完全な「良心」を持つていたほうが人間らしいと思うんです」▼人間とは何か。不完全な良心を持つものか。歴史をふり返れば、これほど邪悪な存在もないだろう。むしろ私たちの心には元々「悪」がいるのではないか▼深遠な問いかけから半世紀が過ぎ、いま私たちの目の前にいるのは人工知能である。心を持たないAIに不安を感じつつ、AIが人間のようになることも恐れる。完全を求めながら、不完全のなかに自らの本質を見いだしてしまう。そんな葛藤が、かつてのシローの悩みと重なる▼マンガには、作者の言葉も小さくあった。「未来のことなども考えながら、このマンガをお楽しみください」。その文字を真つすずに、指先でなぞる。